

ニコラース・ポイクの駿府旅行 旅程

西暦	和暦	行程等	ニコラース・ポイクの駿府旅行記 [日本訳原文写し]
1609年7月1日	慶長14年5月30日	夕刻、平戸へ来航	
			<p>一六〇九年慶長十四年。ニフォン(Nippon)日本。すなわち日本(Japon)の強大な皇帝(mogenden keyser) 皇帝は徳川将軍のこと。ここでは駿府にある大御所家康。のもとへの連合会社(generaele Compe)オランダ東インド会社(略称VOC)を指す。の使節としてのロッテルダム出身のニコラース・ポイク氏(Sr. Nicolaes Puyck) 蘭船フリフィウン号de Griffioen乗組の上級商務員として来日。一六六四年没。により、マヨケ(Mayoque)の地方マヨケはミヤコの訛。イエズス会では京をとり巻く管区の称。、すなわちセルニガウオ(Sernigauo) 駿河。の町へ向けて行われた旅行の記録(Negotie)。</p>
1609年7月27日	慶長14年6月26日	往路。Ferando(平戸)発。夕刻、Fayette(博多)の近傍でAmosma(相島)の前面に碇泊	<p>七月二十七日六月二十六日。前記の使節はフェランド(Ferando)*から。からマヨケに向けて舟で進み、彼のもとには通訳としてオランダ人メルヒオール・ファン・サントフォールト(Melchior van Santvoort)一六〇〇年リーフデ号で漂着、パタニに渡航し、一六〇九年日本に戻り、一六三九年十月まで長崎にいる。が付添っていたが、この人はヤコブ・クワケルナック(Jacob Quakernack)のスヒップ船リーフデLiefde号。で来て、なおこの地に居残った者である。[彼等は]このようにして五乃至六挺の櫂で漕ぐファリフメ(falijfume)*早舟。に乗り、東南東の風を得て出帆し、そして東北東へ向かって帆走し、次いで両側に、様々の、とても人口が多く、かつ実り豊かな嶋々のあるところを通過した。[嶋々は]大変美しく、また高い山勝ちの土地で、しかも真水が豊富である。[彼等は]到るところで多くの小舟を見た。正午に[彼等は]ナウゴイア(Naugoia)名護屋。と名づけられているひとつの城を見たが、[その城は]フェランド*から日本の里程で二マイルのところにあつて、推定によれば、その里程の二乃至三マイルが一ドイツ・マイル(een Duitse mijl)に相当するので、この場合、七[ドイツ・]マイルに当るドイツとはオランダを意味する。。前記の城は、今より先、約一八年以前、前記の皇帝日本皇帝、ここでは豊臣秀吉。により、[彼が]領土を攻略し征服するためホーラ(Chora)高麗。へ行くなり、そこに建てられたものである名護屋築城は天正十九年。。</p> <p>夕刻[彼等は]ファヤッテ(Fayette)博多。地方の近傍で、アモスマ(Amosma)*相之嶋。と呼び、前記の城から約一九マイル以下日本里。のところにある町場の前面に碇泊した。この地で彼等は多くの漁師たちが舟で行くのを見た。</p>

西暦	和暦	行程等	ニコラス・ポイクの駿府旅行記 [日本訳原文写し]
1609年7月28日	慶長14年6月27日	下関海峡を通過	<p>同月二十八日、[我々はこの日の条から主語が一人称に変わる。]新鮮な真水を求めて舟を乗りまわしていたが、朝方には再び出帆した。風は東南東で、我々の航路を東北東、次いで東微北にとり、やがてヨノホアエ(Jonohoae)地ノ嶋。付近で一艘の小型のファリフメ*に出遭ったが、[この舟は]フェランド*の王松浦法印鎮信。が我々に宛てて「皇帝の宮廷[のある町駿河。]から書いて寄越した」「」この間、同筆で欄外に補記。書翰を幾通か携えており、そのなかには、[彼が]我々の[日本への]来着を喜んでいる旨と、またさらに彼が今フィランド(Firando)へ向けて[後から]やって来る途中である旨とを述べてある。</p> <p>正午過ぎに[我々は]、いずれも塔屋を幾つももつ大きな城もしくは城塞を三つ見た。第一のものはワブラマテ(Wabramate)若松。と、そして他の二つのものはコレ(Core)黒崎。及びオラ(Ora)折尾。と名づけられており、それらの近くには、他の[三つの]ものから一マイル離れたところに、ポポレルク(Popolerku)小倉。と名づけられた大きな町がある。その後さらに二人のヤフオーン人(Japhoonderen)日本人。が船上に来たが、この二人はフェランド(Ferando)平戸。の王から両スヒップ船平戸にあるフリフィウンGriffioen号及びローデ・レウ・メット・パイレンRoode Leeuw met Pijien号。のもとへ派遣された者で、次の贈物、すなわち、二尾の大きな鮭と二樽のニフオンの酒(Niphonse wijn)を持参した。そして[彼等は]こう言った。すなわち、我々の当国への来着を王がとても喜んでおり、彼がすでに旅路についたので、彼はたぶん途中で我々に遭うことができるかも知れない、と。このようにして我々は、前記の人々に対して生糸二巻きを贈って返礼とし、また両スヒップ船に宛てた紹介状一通を彼等に持たせて送り出した。そして夜になって[我々は]錨を抜いて、我々がどうしても通過しなくてはならない狭いところ、すなわち海</p>
1609年7月29日	慶長14年6月28日	Maougossima(向島)のすぐ近くの湾で投錨	<p>同月二十九日、[我々は]航路を東南東にとり、次いで南東の風を得て[進路を]東微南に転じ、固定した海岸と嶋々との間に沿って進んだが、時には一斉に櫂で漕いだり、また時には艫櫂ともがいで漕いだりした。正午に、風上に、しかも潮流がさして来る方向へ直面したため、[我々は]マコウゴシマ(Maougossima)向島。の地のすぐ近くの、或る湾三田尻か。のなかでフメ(fume)舟。同志互いに最合もやって投錨したが、[我々は]シムメサツケ(Simmesacke)下関。からここまで二〇マイル帆走して来たのである。</p>
1609年7月30日	慶長14年6月29日	Merosanij(室積)の前面に投錨。夜になって再び漕ぎ進み、Simmesacke(上関の誤記?)を通過	<p>同月三十日、朝、夜明け前に、風上に向かって海岸沿いに幾何かの航程を走り、そして再び投錨した。正午近くには、再び風上へ向かって艫櫂を使ってせつせと漕ぎ進んだ。このあたりでは到るところで、[我々は]東南東の岸辺に多くの小舟を見たが、やがて快適な風を南西から受け、そして北東へと帆走した。このあたり笠戸浦か。で[我々は]両側に、町場や村々を幾つも見た。次いで我々は、メロサニー(Merosanij)室積。の前面に投錨した。夜になって再び漕ぎ進み、そしてシムメサツケ(Simmesacke)下関と読めるが上ノ関の誤記である。を通過したが、ここはシムメナイケ(Simmenijke)下関。を去ること二五マイルのところにある。</p>

西暦	和暦	行程等	ニコラース・ポイクの駿府旅行記 [日本訳原文写し]
1609年7月31日	慶長14年7月1日	午後、投錨し真水を取る。日没近く再び帆走を始め、夕刻、Canoto (家室?)の近くで松浦法印鎮信と逢う。	<p>高月未日七月一日。朝は西の風であつたが、正午には北寄りの風になり、次いで [我々は]素晴らしい風を得[て、走]った。[我々は]午後には差し潮に直面したため投錨して[陸地へ]真水を取りに行つて来た。日没近く[我々は]再び帆走を始め、航路を北東微東に、次いで東北東にとつた。[我々は]帆走して、その後大方はほぼ陸地の広がりに沿つて走つた。すなわち[我々は]常にニフォンの固定した陸地を我々の北方に、また南側にはシコケ(Sicoke)四国。と名づけられた大きな実り豊かな島に沿つて散在する多数の島々を見続けた。この大きな島は、四つの州(4 pro-vintien)、すなわちエイオ(Eio)伊予、トッサ(Tossa)土佐、サルンケ(Sarnke)*讃岐、及びアワ(Awa)阿波に分かれているが、その領主たちは、もし日本人が戦争を起こしたら、総べて五〇万の兵を戦場に送ることができ、また、前記の島四国。には二〇の城がある。</p> <p>夕刻我々は、カノト(Canoto)*家室。の地の近くで、王のフォラサメ(Forsame)法印様。と出遭つたが、[王は]その場へ彼の所持するガレイ船(galeyen)櫂つき帆船。すなわちファヤスメ(fayasumen)ファヤフメの誤写。三艘を率いてやつて来ており、彼の到着を知らされると、我々は、彼の[坐船の]近くに投錨した。すると[王は]彼の船上へ来るようにと我々を呼びに人を寄越したので、我々は彼のところへ行き、[彼等は]我々に喜びの表情を示し、大きな友情を表した。[彼は]年齢六五歳正しくは六〇歳程。で、すこぶる元気良く、しかも、見知らぬ事柄を何でも聞いたり見たりすることに大変好奇心をもつていた。夜になつて[我々は]彼から暇いとまを得て戻つて来たが、[彼は]我々に、日本の大皇帝サンマルドンナ(Sammardonna)様と殿とを重ねたものか。家康のこと。と護衛に当るひとりの貴人後に出るコンセケドルメに当る。とにそれぞれ宛てた紹介の書翰を与えた。同時に[我々も]彼に、両スヒップ船[の船長たち]に宛てた書翰を託して見送つた。</p>
1609年8月1日	慶長14年7月2日	Couranga(倉橋島?)の前面を通過。Amangij(蒲刈?)、Tadanomij(忠海?)、Moye(大三島の甘崎か)を見、夕刻、Thome(備後鞆)の前面に投錨	<p>八月一日、日の出のかなり以前に我々の航海が始められ、そして[我々は]クーランガ(Couranga)倉橋島。と名づけられる村の前面を通過した。[我々は]大抵は海岸沿いに、東と北東の間に針路をとりつつ近道を走り、そのさい我々の右舷に、総べてが海岸に沿つて数えられない程ある島々を見ながら後にしたが、[その島々は]所々で狭いところや海峡を作つており、[また]村々や住居の数々で縁どられていて、一〇マイル先へ進むと、アマンゲイ(Amangij)蒲刈。がある。[我々は]タキサツケ(Takisacke)高崎。の村を見、そしてさらに一マイル先には小さな町タダノメイ(Tadano-mij)忠海。があり、そしてさらに一マイル先へ進むとモイエ(Moye)大三島の甘崎か。高根島の能地か。と呼ばれる町場があつた。今や[我々は]愉快的前進を続けることを得、そして午後にはなおも前記の王の[別の]従者たちの一行に遭い、その後[我々は]さらに我々の前進を続けた。日没近く我々は、ひとつの塔阿武戸盤台寺観音堂。の近くを通過したが、この塔は水面に沿つて高い平坦な岩の上に建てられた小さな礼拝堂のところにあり、その場所では、通過する人々が、何がしかの捧げ物を投げ込んだ。次いで我々は、夕刻トメ(Thome)備後鞆。の町の前面に投錨した。[町の]中央にはかつてひとつの大きな城があつたが、今では何と大部分破壊されてしまつている。家々は総べて瓦で葺かれており、そしてコンメサツケ(Commesacke)上関。から四〇マイルのところに位置している。</p>

西暦	和暦	行程等	ニコラース・ポイクの駿府旅行記 [日本訳原文写し]
1609年8月2日	慶長14年7月3日	夜間に出帆、Sinogay(下津井?)の城を見て、正午にこの島の近くに投錨し真水を取る。再度出帆し、Ulsamado(牛窓?)の近くを帆走して通過、Madijo(室津)の前面に投錨	同月二日、夜間に出帆して、朝方早く[我々は]南西の風を得て我々の針路を東微北にとった。トメよりさらに十マイル進むと、山地の上にシノハイ(Sinogay)*下津井。と呼ぶひとつの別の城が見えたが、[この城は]大変立派に、しかも頑丈に造られていた。またこれより以前三日間の途上でも、水面に沿ってもうひとつの城があった。正午にこの島下津井近くの一島か。の近くに投錨して真水を取りに行き、そして直ちに再度出帆した。午後[我々は]二〇マイル先にあるウルサマド(Ulsamado)牛窓。という小さな町の近くを帆走して通過し、次いでその先へ一〇マイル進んで、我々はマディヨ(Madijo)室津。の町の前面に投錨した。
1609年8月3日	慶長14年7月4日	Orajamme(室山?)、Famape(姫路?)、Akanen(明石)の城の近くを通過、夕刻、Osacke(大坂)の前面に投錨	同月三日、さらに[我々は]東微南、次いで東南東に向けて再度漕ぎ進み、そして[それぞれが]人口の稠密な町をもつ二つの美しい城の近くを漕いで通過したが、第一のものはオラヤムメ(Orajamme)室山。、第二のものはファミペ(Famape)姫路。と呼ばれており、[後者は]マディヨから七マイルのところにある。この地で[我々は]多くのフメと漁師たちが海上にいるのを見、次いでファミペから一四マイル先へ進むと、ひとつの城とアカネン(Akanen)明石。と呼ばれる町があり、夕刻には[我々は]オサツケ(Osacke)大坂。の町の前面に投錨した。
1609年8月4日	慶長14年7月5日	Osacke(大坂)でヤン・ヨーステン(Jan Joosten)及びピ[ーテ]ル・フェンスゾーン(Pr. Vensz.)[ヤンスゾーンJansz.の誤記。]の二人のオランダ人と会う	同月四日、アカネンから二〇マイルのところにあるデムホエ(Demgoe)*伝法。の村を南に見ながら後にして、河淀川。を櫂で漕いで遡った。この河は入口のところで二つの流れをもっているが、しかしオサツケは両側に住民がいて、しかも多くの村々や町々をもっている。五〇〇艘以上のフメが互いに集まっては海上へ向かうところであった。その河を辿って一マイル遡ると、我々は大都市オサツケを見、そしてその地で[我々は]ヤン・ヨーステン(Jan Joosten)耶揚子。及びピ[ーテ]ル・フェンスゾーン(Pr. Vensz.)ヤンスゾーンJansz.の誤記。と名乗る、ヤコブ・ヤンスゾーン・クワケルナック(Jacob Jansz. Quakernack)*のスヒップ船にいた二人のオランダ人と出くわしたが、[両人は]ランガサツケ(Langasacke)長崎。とフィランドへ向けて旅行中なのである。
1609年8月5日	慶長14年7月6日	夕刻、Fisonij(伏見)へ向け出発。河を遡る	同月五日、夕刻[我々は]出発し、フィソニイ(Fisonij)伏見。へ向けて河を遡ったが、その地はオサツケから一〇マイルのところにある。
1609年8月6日	慶長14年7月7日	Figatte(枚方)を通過し、夕刻Fisonij(伏見)へ到着。馬に乗って行くための準備を整える	同月六日、フィハツテ(Figatte)枚方。まで[河を]通過して、フィソニイへの行程の半分に達したが、その地伏見。へ[我々は]夕刻到着し、この先、馬に乗って行くための準備を整え、王の飛脚も来合わせていた。

ニコラース・ポイクの駿府旅行 旅程

西暦	和暦	行程等	ニコラース・ポイクの駿府旅行記 [日本訳原文写し]
1609年8月7日	慶長14年7月8日	Fisonij(伏見)から馬で出発し、Oost(大津)で新しい馬を雇った。夕刻、Consatij(草津)を通過	同月七日、我々はオオストから馬で出発し、そしてその地から二マイル先のオオスト(Oost)大津。まで来て、新しい馬を雇った。途中、刑柱の上に置いたひとりの男の頭が見えたが、しかし[その男は]以前僅か三本の木の棒を盗んだだけであった。夕刻[我々は]オオストから四マイルのところにあるコンサテイ(Consatij)草津。を通過することとなった。
1609年8月8日	慶長14年7月9日	Asibe(石部)に到着し、馬が換えられた。さらに、Mimatsz(水口)、Soetsiau(土山)、Sacka(関)まで来て馬を換え、夕刻にはSebijseho(関の地蔵)に来て宿泊	同月八日、コンサテイから三マイルあるアシベ(Asibe)*石部。に到着し、そして馬が換えられた。その地から三マイル進んでミマツズ(Mimatsz)水口。に、ついでさらに三マイル進んで、さらにスーツィアウ(Soetsiau)土山。まで来、そこからサッカ(Sacka)関。まで来て馬を換え、そして夕刻には、コンサテイから三マイルあるセベイセホ(Sebijseho)関の地蔵。に来て宿泊した。
1609年8月9日	慶長14年7月10日	Sebijseho(関の地蔵)を出発、Coumamme(亀山)まで前進し、10マイルは舟で通過、夕刻にはMeay(宮、今の熱田)に到着し宿泊	同月九日、我々はセベイセホから出発してコウマムメ(Coumamme)亀山。まで三マイル前進し、そしてそこから一〇マイル桑名までの陸路を含む。は海の、腕のように入り込んだところを数艘のフメで通過して、夕刻には、メアイ(Meay)宮。今の熱田。に到着した。
1609年8月10日	慶長14年7月11日	Meay(宮、今の熱田)を出発し、Narmij(鳴海)、T'sio(知鯉附)を通過、Josmey(吉田)に到着し宿泊	同月十日、メアイから再度馬に乗り、その地から一マイル半進んでナルミイ(Narmij)鳴海。まで来て馬から降りて軽食で気分を新たに。同じようにして[馬で]ツィオ(T'sio)知鯉附。まで旅を続け、そして夕刻近くアサッケ(Asacke)赤坂。まで来て馬から降りて軽食で気分を新たに、そして夜になって、オサッケ(Osacke)岡崎。から八マイルあるヨスメイ(Josmey)吉田。に到着した。
1609年8月11日	慶長14年7月12日	Josmey(吉田)を出発し、Stangwa(二川)で馬を換え、Forretsche(白須賀)で二人のオランダ人に会う。Gamotij(浜松)、Tamegouwa(天竜川)を通過し、夕刻、Maskenocko(見附)に到着し宿泊	同月十一日、[我々は]ヨスメイから出発し、そして、スタングワ(Stangwa)二川。まで来て再び馬を換え、そしてさらにフォレツチェ(Forretsche)白須賀。まで来た。この地で我々は、なおもヤコブ・クワケルナック配下の乗組員の二人のドイツ人オランダのこと。に逢ったが、[彼等両人は]両スヒップ船のところへ行きたがっており、自ら[両船に雇われて]服務することを申し出て、そして我々と行を共にしてアカイ(Akai)荒井。へ引き返し、次いでマヤッケ(Mayacke)都。へ向けて立ち去った。この地荒井。から我々は馬に乗ってハモティ(Gamotij)浜松。の町へ向かったが、その町はフォスムダイ(Fosmday)吉田。からは九マイルのところにある。正午に[我々は]ハモティから出発したが、途中にはタメゴウワ(Tamegouwa)天竜川。の河がある。そして夕刻には、サママトイ(Samamatij)浜松。から三マイル来たマスケノッコ(Maske-nocko)見附。に到着した。
1609年8月12日	慶長14年7月13日	Chosera(袋井)、Kakamma(掛川)、Nisacke(日坂)、Kama(金谷)、Sumada(島田)を通過し、Fuedseda(藤枝)に到着し宿泊	同月十二日、我々は馬に乗ってホセラ(Chosera)*袋井。へ向かい、そして[馬を換え、次いでカカムマ(Kakamma)掛川。まで来て同じことをした。正午にはニサッケ(Nisacke)日坂。を通過し、次いでカマ(Kama)金谷。まで馬で進んで馬を換え、次いでスマダ(Sumada)島田。で再び[馬を換え]、そして夕刻にはフエゼダ(Fuedseda)*藤枝。に到着した。

西暦	和暦	行程等	ニコラス・ポイクの駿府旅行記 [日本訳原文写し]
1609年8月13日	慶長14年7月14日	Fuedseda(藤枝)を出発し、Mardij(鞠子)を通過、正午にSarigu(駿河)に到着。Godgedonne(後藤庄三郎光次、金座頭取とKosekedonne(本多上野介正純)に面会、皇帝(家康)に取次ぐ約束を取る	同月十二日。フエセダから出発して、ヤバ(ヤバ)河部。まで来て、この地からさらにマルディ(Mardij)鞠子。まで進み、そして正午には、マトラウホ(Matrauho)見附。から一六マイル離れたところにあるサリグ(Sarigu)駿河。に到着したが、この地で[我々は]二人のドイツ人(2 Duutschen)*が住んでいるのを見出した。この地には皇帝家康。がおり、そしてこの地で[我々は、皇帝から自分たちを]命令伝達のため見参させて頂くよう要望した。そして[我々は]このようにしてまず、ゴトヘドンネ(Godgedonne)後藤庄三郎光次、金座頭取。の面前へ呼び出されたが、この人物が我々の来着と要望を皇帝に伝えることになっていた。同様に[我々は]コセケドンネ(Kosekedonne)本多上野介正純。の面前に出頭することを命ぜられ、そして彼に、フォヤサンマ(Foyasamma)法印様。と呼ばれるフェランドの王からの、曩に旅の途上で彼により我々に手渡された手紙を渡し、次いで[我々は]緞子(dammaste)から成る若干の贈物を贈ったが、しかしそれにもかかわらず[彼等は]受取ろうとはしなかった。[ともあれ、彼等は]大いに歓迎するとの言葉を我々に述べた上、我々の要望を皇帝に取次ぐことを約束した。我々に先立つこと三日以前に、この地には三人のポルトガル人前年占城帰りにマカオに寄航した有馬晴信の朱印船の日本商人が殺害されたため、日本人の天川渡航停止請願の目的で、この年来航したポルトガル船、通称マードレ・デ・デウス号、正しくはノッサ・セニョーラ・デ・グラサNossa Senhora de Graza号の代表として駿府に至り、やはり慶長十四年七月二十五日付の朱印状でこれを認められる。が、他の数人の使用人たち(Servios)*を伴って到着し、スヒップ船アンドレオ・ペッソア('t schip Andreo Pessoa)号ペッソアは船名でなく司令官の名、元有馬船員帰化南蛮人の報告でマカオ事件の当事者と判っており、のち長崎奉行長谷川藤広に喚問される前に海上に出て船を焼く。からの贈物を皇帝のもとへ携行しているが、しかし、我々が来たため、[彼等が]そうすることを強く要望していたにもかかわらず、謁見のこともないまま、遅延を余儀なくされていたのである。
1609年8月14日	慶長14年7月15日	家康に謁見	同月十四日、[我々は]御城のなかで、皇帝ゴヘイサムマ(Gohijsamme)大御所様。の面前に呼び出され、そして彼に、生糸(rouwe sijde)、鉛(loot)から成る若干の贈物に、公子閣下(princel. Extie)オランダ共和国総督オランニエ公。の書翰を添えて手渡し、そして我々の要望を言上したが、そのことを陛下(zijne Mat)家康。はとても喜び、我々にあらゆる好意を賜うことを約束し、かつ自由な取引を申し出、しかも、もし我々が貨幣を必要とするならば、我々に[これを用立てて]援助するつもりである[と述べた]以下、平戸到着まで同月十五日・十六日・十七日・十九日・二十一日・二十九日・三十一日、九月六日の記事は原文にない。
1609年8月15日	慶長14年7月16日		
1609年8月16日	慶長14年7月17日		
1609年8月17日	慶長14年7月18日		

ニコラース・ポイクの駿府旅行 旅程

西暦	和暦	行程等	ニコラース・ポイクの駿府旅行記 [日本訳原文写し]
1609年8月18日	慶長14年7月19日		同月十六日、ホルネカル人たちが皇帝の面前に出た。そして「彼等は」この場で我々オランダ人。のことを海賊であると吹聴したが、しかし「彼等はその進言を」考慮されなかった。
1609年8月19日	慶長14年7月20日		
1609年8月20日	慶長14年7月21日	朱印状四通と書翰一通を受領	同月二十日慶長十四年七月二十一日。、「我々は」我々の特許状(Onse patente)オランダ船の日本渡航を認める現存最初の徳川家康朱印状。阿蘭陀国主宛ての家康復書とともに日付は慶長十四年七月二十五日付であるが、押印は『異国日記』にある通り二十一日であり、ポイク一行は即日その下賜を受けたのである。及び陛下から閣下オランダ公。に宛てた書翰数通正しくは朱印状四通と書翰一通である。を入手し、その特許状を持ち帰ることをも命ぜられた。ゴヘイサムメは我々に、立派なハタネ(gatane)刀。一振りを下賜した。
1609年8月21日	慶長14年7月22日		
1609年8月22日	慶長14年7月23日	復路。Saringau(駿河)発、Kakingawa(掛川)着、泊	同月二十二日、我々はアリアーン(Ariaen)デルフト出身のピーテル・アドリアーンセン・ブランカルトPieter Adriaensz. Blanckartを指す。及びコルネリス(Cornelis)トマス・コルネリスセンThomasa Conelisz. またはヤン・コルネリスセンJan Cornelisz.のいずれかに当る。という二人のドイツ人オランダ人。通訳を伴い、皇帝の無料の駄馬[の利用の証明]である一通の証書を得て、オサッカ大坂。へ向けて出発した。「我々は」カキングワ(Kakingawa)掛川。を通過することとなったが、ここは皇帝の住むサリンガウ(Saringau)駿河。から一ニマイルのところであり、この日「我々は」六回馬を換えた。
1609年8月23日	慶長14年7月24日	Kakingawa(掛川)発、Johinday(吉田)着、泊	同月二十三日、カキングワを再び出発し、正午にはカキングワから一ニマイルのところにあるファウラマン(Fauraman)浜名郡篠原の立て場。小笠原腹川と混同したものか。を過ぎ、しかも途上四回馬を換えた。途上、マンゴイア(Mangoia)馬郡。浜名湖口にある。の河を一マイル小舟で渡り、次いで三回馬から降りて軽食で気分を新たにした。夜になって「我々は」フユママティ(Fumamatij)浜松。より九マイル離れたヨヒンダイ(Johinday)吉田。に来着した。
1609年8月24日	慶長14年7月25日	Johinday(吉田)発、Neay(宮)着、泊	同月二十四日、ヨヒンダイから七マイル半来て、カサツケ(Kasacke)岡崎。を通過し、夕刻は、オザツケ(Ozacke)岡崎。より七マイル半来たメアイ宮。に宿泊した。そしてこの日は八回馬を換えた。夜間一艘のフメで或る川木曾川河口、正しくは揖斐川を指す。を渡り、そして二十五日朝、ネアイ(Neay)*宮。から七マイルのところにあるクアノ(Cuano)桑名。まで来て投錨した。この町にもまたひとつの城がある。この地から馬でヨコティ(Jokotij)四日市。に来て、正午にはフアフォ(Huauo)桑名。から十一マイル先のセハノサ(Sehanosa)坂ノ下。に来て宿泊した。

ニコラス・ポイクの駿府旅行 旅程

西暦	和暦	行程等	ニコラス・ポイクの駿府旅行記 [日本訳原文写し]
1609年8月25日	慶長14年7月26日	Neay(宮)、Sehanosa(坂之下)着、泊	
1609年8月26日	慶長14年7月27日	Sehanosa(坂之下)発、Cotij(草津)着、泊	同月二十六日、セハノサから馬で進み、そして正午にはイセメエ(Isemee)石部。を過ぎたが、四回馬を乗り替えて、九マイルの道程をメタン(Metan)*都。へ向けて進み、[次いで]二回馬を換えて、そして夕刻にはイシケン(Ysiken)伏見又は西陣。から七マイルのところにあるコティ(Cotij)草津。に到着した。
1609年8月27日	慶長14年7月28日	Cotij(草津)発、Menga(都)着、泊?	同月二十七日、大きな町、メンガ(Menga)都。へ向けて馬で進んだが、そこはオオスト大津。から三マイルのところであり、この地への途上[我々は]彼等日本人。の悪魔的なフォツレリ(baer duvelsche fottelerie)ホトケ。リチャード・コックスの日記一六一五年八月二十七日の条のfuttaquiuisに相当する。すなわち偶像をたくさん見たが、それらを彼等は必要としかつ崇拝している。
1609年8月28日	慶長14年7月29日	Menga(都)発、Fisommij(伏見)へ。Fisommij(伏見)を出発しCosacke(大坂)へ向け、河を10マイル進んだ	同月二十八日、[我々は]フィソムメイ(Fisommij)伏見。へ向けて出発した。我々は途上で、多くの悪魔的なフォツレイン像(duvelsche fottelijnsche finguyren)を見た。同日夕刻フィソムメイを出発して、コサッケ(Cosacke)大坂。へ向けて河の水面を一〇マイル進んだ。
1609年8月29日	慶長14年7月30日		
1609年8月30日	慶長14年8月1日	Sackay(堺)へ向け、陸路を出発	同月三十日、美しい町サッカイ(Sackay)堺。へ向かって[我々は]そこを見物するため陸路をとって出発した。
1609年8月31日	慶長14年8月2日		
1609年9月1日	慶長14年8月3日	Sackay(堺)へ向け、舟で向かう	九月一日慶長一四年、八月三日。サッカイへ向け一艘のフメに乗り、一八艘のフメを従えて旅をした。
1609年9月2日	慶長14年8月4日	Sackay(堺)着、泊	同月二日、同地へ到着したが、ここはオサッケ大坂。から二マイルのところにある。次いで同月三日にはフェランドへ向けて出帆し、丸一日漕ぎ進んだが、さらに二〇マイルは帆走した。そこまで来ると[我々は]、メルヒオール・フォン・サントフォールトを、メレト(Mereto)室津。で彼[自身]の業務を続けるため、後に残した。

ニコラース・ポイクの駿府旅行 旅程

西暦	和暦	行程等	ニコラース・ポイクの駿府旅行記 [日本訳原文写し]
1609年9月3日	慶長14年8月5日	Ferando(平戸)へ向けSackay(堺)を出発、20マイル帆走、mereto(室津?)で通訳サントフォールトと別れる	
1609年9月4日	慶長14年8月6日	Osinada(牛窓=瀬戸内市牛窓町?)まで帆走。ここで、William Adamsに再会。夜、Keome Jore(備中浅口郡黒崎か)の島の近くに投錨	同月四日、メロ(Mero)室。から一〇マイル先のオシナダ(Osinada)牛窓。まで帆走した。その地で[我々は]ヤコブ・クワケルナックの舵手であった、ひとりのイギリス人、アダムスセン(een Engelsman Adamsz.)ウィリアム・アダムズ、すなわち三浦按針を指す。に再会した。[彼は]フェランドから来たが、この人物は同地へ、皇帝からの書翰数通を携えて、両スヒップ船を臨検し、かつ我々オランダ人。に王松浦鎮信。の友情と、彼が我々に彼の土地を貸し与える旨を伝えるために派遣されたが、彼はその地平戸。へ我々の出発以前に派遣され[て到着しており]、我々の両スヒップ船からの書翰数通と[口頭の]知らせを我々に齎したのであり、そしてこのようにして[我々は]互いに別れた。夜になって我々はウツィンニアダ(Utsinniada)牛窓。から七マイル離れたケオメ・ヨレ(Keome Jore)備中浅口郡黒崎か。の島の近くに投錨した。
1609年9月5日	慶長14年8月7日	Koeme Jore(黒崎か)からThome(鞆)まで15マイル帆走、Thome(鞆)を夜間に通過	同月五日、クーメ・ヨレ(Koeme Jore)からトメ(Thome)鞆。まで一五マイルも帆走して、そして[我々は]その地を夜間に通過した。
1609年9月6日	慶長14年8月8日		
1609年9月7日	慶長14年8月9日	午後、嵐に遭遇、舵を修理	同月七日、午後[我々は]嵐に遭った。そのため我々は毀れた我々の舵を修理する仕事に従事しており、しかもその間トモ(Thomo)鞆。から四〇マイル先に相接して横たわる二つの村、カネセッキ(Caneseckij)観音崎。及びマオラティ(Maoratij)御手洗。の間の狭いところの下方まで一八マイル流されて行って、そのため我々は、多数の小舟の援助で[風上へ]曳航された。
1609年9月8日	慶長14年8月10日	Caneseckij(観音崎)及びMaoratij(御手洗?)の狭いところを通過、逆風のため船旅を延期	同月八日、例の狭いところを[我々は]マオラティの前面に住む漁師たちの出してくれた一艘の別のフメに乗って進んだが、それは前夜我々の乗っていたフメが海の振動により故障してしまったからである。しかも逆風のため[我々は]適切な天気になるまで船旅を延ばさなくてはならなかった。船頭たちは困って、サワイソウドソ(Sawaysoudoso)船霊の名か。という(彼等日本人。の言うところに従えば)風と天気を司る偶像すなわち悪魔のために捧げ物をした。
1609年9月9日	慶長14年8月11日	嵐のため待機	同月九日、なおも強い風が吹いた。海に面して住むこの国民は、何らかの嵐を認めると、その都度恐ろしい声を挙げて叫んだが、[彼等は]そうすることによって嵐を静めようと考えているのである。

西暦	和暦	行程等	ニコラース・ポイクの駿府旅行記 [日本訳原文写し]
1609年9月10日	慶長14年8月12日	舟の装備が終わり出帆、夜、Merod Sommay(光市室積か)で投錨	同月十日、フメの装備が終わり、そして今までよりも良い天気になったので、[我々は]正午近く、この地御手洗か。を出て、カンメサケ(Cammesacke)上ノ関。から五マイルのところにあるメロド・ソムナイ(Merod Sommay)室積。へ向けて櫂で漕ぎ進み、そしてこの地に夜になって投錨した。
1609年9月11日	慶長14年8月13日	Merod Sommay(光市室積か)からSimmesackij(下関)まで帆走、下関碇泊	同月十一日、強い風を得たので、[我々は]翌日の朝まで帆走したり櫂で漕いだりして、メロド・ソムナイからシメサッキ下関。まで三十マイル進んだ。
1609年9月12日	慶長14年8月14日	Simmesackij(下関)の海岸を離れ、午後、Corijsackij(狩尾崎か)を通過、夕刻、Bobbeke(呼子、唐津市呼子町)に碇泊	同月十二日、なお上記の風が吹き続け、そして、[我々は]固定した海岸を離れて、我々の針路を島々の方へとった。午後我々はシメサッキ(Simmesackij)から一四(マ)マイルのところにあるコレイサッキ(Corijssackij)狩尾崎か。を通過した。上記の場所の近くには多数の岩礁や干潟沖ケ瀬か。があり、そのため[我々は]我々の舵を[岩礁に]当ててしまったが、そこは、ヨノシマ(Jonossima)地ノ島の島とカムフェライ(Campheray)遠見鼻か。との間であったと判断する。岬に近ければ近い程、[海底は]綺麗である。夕刻我々は、ボツベケ(Bobbeke)呼子。と呼ぶ良好な碇泊地に投錨したが、ここは、カムヘトケイ(Camgetkij)上ノ関。たぶん下関の誤記。から二九マイルのところであり、なおフェランドからは一七マイルのところにある。
1609年9月13日	慶長14年8月15日	Bobbeke(呼子、唐津市呼子町)からNograngier(名護屋)まで早舟で航行。陸路を馬で進む。その後、途上では舟で通過。正午に一艘の舟に乗ってさらに帆走し、夕刻、Ferando(平戸)に到着	同月十三日*、さらに一マイルを一艘のプラウ船快速艇。早舟のこと。でノホランヒール(Nograngier)名護屋。まで航行し、そこにはひとつの城があるが、[我々は]その地で二頭の馬を雇い入れ、そしてこのようにしてフェランドへ向けて陸路を馬で進んだ。その後[我々は]途上で或る水面を[舟で]通過しなくてはならなかった。正午に、天気が幾分静穏となったので、[我々は]一艘のフメに乗ってさらに帆走し、そして夕刻、程良い時刻にフィランドに到着した。